

東臺美術會大會は昨日午後一時より東京美術學校俱樂部内にて開催正木校長缺席、大村氏代理、和田英作、朝倉文夫氏等其他

▼百二十餘名參會せり 白井理事の庶務報告、島田〔佳矣〕理事の會計報告を終つて規則改正の件に入るや劈頭同會の依囑製作に就て議起り金工、漆工の工業美術側は依囑製作の繼續を主張し繪畫、彫刻の純美術側は廢止を主張し激論沸騰の結果彫刻の小倉右一郎氏は起つて

▼依囑製作に於ける醜事實及其弊害を論じたる結果終に今後同依囑製作は全廢に決し猶卒業生大會にて問題となりし所謂陰謀組の大村、白井等の役員を全部改選することとなり午後五時閉會せるが近頃になき議論沸騰の終始を見たり 改選方法に就ては不日在京の會員に

▼投票用紙を配り選舉を行ふべく改選の上は比際規則改正し情弊を一掃すべしと硬派側は敦圜居れり 尙國民美術協會の規則改正は一つ橋の學士會にて午後四時頃より舉行し來會者四百名に及び

(九) 改革運動の結末

校内に於ける生徒の反抗運動は逸早く収まり、平常の授業が行われていた反面、校外では以上述べたように改革運動が大きく盛り上がり、世間が注目する中で会計検査が行われて、その結果、正木校長譴責、高田會計主任減俸の処分が下された。高田は明治二十七年から本校の事務員をつとめていた人で、同三十七年に會計主任となつたが、本校の會計事務が煩瑣を極めたため神経を病み、さらに

大正三年以降は開校滿二十五年記念事業や御大典関係の依囑製作事業が重なり、今回またわずかな法規違反によつて減俸処分を受けるなどして病が悪化し、処分の当日本校を辭職した。

こうした処分があつた後、卒業生有志の中には一部議員と通じて問題を議會にまで持ち込もうとする者もあつたようだが、そこまでは至らず、言論界も急速に沈靜化して行つた。沈靜化の最も大きな原因と考えられるのは、改革派の急先鋒岩村透の病が悪化したことである。岩村は運動の成果も十分得られないまま、翌大正六年八月十七日に死去してしまつた。岩村の、人身攻撃をも辞さぬ過激な美術學校批判や美術界、ジャーナリズムへの煽動は、時には響聲を買つたこともあつたが、このように身を挺して真向から本校に改革を迫つた人は外に無いと言つてよく、その改革案の是非は兎も角として美術教育に対して示した熱意は評価すべきであらう。

なお、本校に於ては前出『黒田清輝日記』に明らかかなように、主任會議で改革問題が検討され、教官會議も開かれ、各科、各部門からの改革案提出があり、協議が続けられたが、その中で黒田の言う「大改革の精神」が次第に失われ、結局、各科、各部門で検討を重ねた上で実施できるものから改革を実施してゆくことに歸着した。そして、人事刷新、教育制度改革等が徐々に進められ、それらを土台として大正十二年に至つて「東京美術學校規則」の大幅な改正が行われることになる。

④ 平田松堂採用

大正五年五月二日、平田松堂が図画師範科日本画授業囑託として

採用された。松堂は本名栄二。明治十五年生まれ。同三十四年二月から六月まで共立美術学館で学び、同年九月本校に入学。傍ら川合玉堂に師事し、同三十九年日本撰科を卒業した。翌四十年の東京勸業博覧会で三等銅賞受賞。また、文展には第一回より出品し、第八回(大正三年)、第九回(同四年)と続けて三等賞を受賞。その業績が認められて本校に採用された。以後、本校助教(大正八年)、同教授(同十四年)、図画師範科主任(昭和三年〜同七年退官)となり、一方、帝展審査委員(大正十四年〜昭和三年)もつとめた。なお、松堂は平田東助伯爵の長男で、大正十四年に襲爵するが、大正三年の文展で彼が受賞したときは、『二六新報』(同年十一月二十二日)が平田父子の顔写真と受賞作「小鳥の声」の写真を掲げ、「長閑の参謀長」の総領息子である「新進の華胄画家」を大々的に紹介した。

⑤ 竹内久一死去

大正五年九月二十四日、彫刻科教授竹内久一が死去した。葬儀は二十七日に谷中斎場で行われた。『東京美術学校校友会月報』第十五巻第六号には屋代鉞三による追悼記事と略歴、肖像写真、最近作木彫久米舞の写真が掲載されている。追悼記事は次のとおりである。

竹内先生の卒去

(晁江記)

大正五年九月二十四日、東京美術学校教授帝室技藝員従四位勲四等竹内久一先生卒去せらる。洵に悲痛の情に堪へざるなり。先生は本校の開校(明治二十二年二月)に先ち明治二十一年四月本校に聘せられてより二十有九年、職を本校に奉じ、内にありては孜

々として後進を薰陶し、外にありては諸會の審査官、鑑査官、委員等として、美術界のために盡されたる功勞の著大なることは、何人も知る所にして今更喋々を要せざるなり。先生の病に罹りたるは本年九月初旬なりしが、中旬に迫りて漸く重く、遂に起つ能はざるに至れり。享年六十。病革るや、特旨を以て位一級を進め、従四位に叙せられ、訃の聞ゆるや、祭棗料を下賜せらる。餘榮ありといふべし。先生は生粹の江戸ッ子にして、安政四年七月九日、江戸淺草谷中天王門前山川町に生れ、洒落にして奇行に富めり。初め堀内龍仙、川本洲樂の門に入りて象牙彫刻を學びたりしが、明治十三年觀古美術會に於て奈良興福寺の古像を見て大に感ずる所あり。木材彫刻を以て身を立てんと決意し、其後再三奈良に遊びて研鑽^{〔馳カ〕}怠らず、遂に擢られて本校に聘せられ、木彫の鉦匠として令名を聘せたり。

竹内久一は旧名を兼五郎といい、久遠と号した。岡倉覚三に拔擢されて本校開校準備に携わり、神武天皇、伎芸天、日蓮上人銅像木型その他の木彫大作を制作し、木彫の復興につとめた。岡倉校長退陣後、彫刻科の方針が変わり、塑造が中心となつて行つた中ではその活躍の範囲は狭められたが、高村光雲とともに老大家としてなお彫刻教育に尽くし、文展や博覧會の審査官をもつとめた。制作歴の概要については吉田千鶴子著「竹内久一レポート」(『東京芸術大学美術学部紀要』第十六号。昭和五十六年)を参照されたい。

⑥ 前田香雪死去

もと囑託前田香雪の死去を『東京美術学校校友会月報』第十五巻